

# 六本木未来会議

デザインとアートと人をつなぐ街に

石上純也 建築家

Junya Ishigami / Architect



## CREATOR<sup>No</sup> INTERVIEW 94

石上純也 Junya Ishigami

1974年神奈川県生まれ。東京藝術大学大学院美術研究科建築科修士課程修了。妹島和世建築設計事務所を経て、2004年、石上純也建築設計事務所設立。日本建築学会賞、第12回ヴェネチア・ビエンナーレ国際建築展金獅子賞など多数受賞。

<http://jnyi.jp>

No  
94

石上純也 建築家

JUNYA ISHIGAMI / Architect

生活と創作作品が一体化したとき、リアリティが生まれる。



クリエイターインタビュー

『未来の都市づくりは風景について考えること』

published\_2018.7.4 / photo\_mariko tagashira / text\_nana okamoto

誰も想像しなかった場所、カタチ、空間。一見、突飛に思えるが、実は何よりもその土地になじみ、その場所の魅力を引き出している——。そんな建築をつくり続けている石上純也さん。現在、パリのカルティエ現代美術財団で開催されている『Junya Ishigami, Freeing Architecture』でも高い評価を受け、9月まで会期が延長されたばかり。そんな石上さんに未来の都市がどうあるべきか、そして六本木がアート、デザインの街になっていくために何が必要かを聞きました。

#### 六本木の雰囲気と、事務所の空気がなじんでいる感覚。

現在、森美術館で開催されている『建築の日本展』に作品展示をしていたり、僕の事務所は六本木にあったりと、何かと縁のある六本木ですが、そもそも越してきたのは条件に合った物件がここにあったというのが理由。だから、この街にいるのは偶然といえば偶然なんです。でも、実際に拠点にしてみると、意外な発見がありました。思った以上に土地に起伏があったり、緑が多かったり、昔ながらの街区の構造が残っていたり。散歩していて楽しい場所なんです。それに、うちの事務所は海外の方も多いので、いろんな人種やカルチャーが混ざり合っている街という意味でも、なじんでいる感覚はあります。

あえて言うなら、首都高の高架がなければ、もっと明るいイメージになるんじゃないかなとは思います。やっぱり、六本木というと「ROPPONGI」と書かれた交差点の高架を思い浮かべるじゃないですか。現実的には難しいかもしれませんが、もしもあの高架がなく、太陽が遮られず日光に満ちていたら雰囲気がガラッと変わる気がするんです。と言いながら、高速を走っているときは気持ちいいんですけど（笑）。



### 建築の日本展：その遺伝子のもたらすもの

2018年4月25日(水)～9月17日(月)に森美術館で開催。ここで石上さんは『House & Restaurant』という、山口県宇部市で進行中のプロジェクトのコンクリート模型を展示している。

House & Restaurant

© junya.ishigami+associates

## ランドスケープに根差した日本の都市構造を生かす。

東京の都市構造がほかの国と違うのは、成り立ちが地形に関係づけられている点だと思います。たとえば、六本木のあたりはもともと山の上だったというのもあり、昔からの屋敷が並ぶ住宅街であったり、谷の部分は古くからある商店町といった商業地域など、江戸時代から変わらない都市構造がある。一方、特にヨーロッパなどは地形ではなく、街区や建物の並び方で都市の構造ができあがっている。何が違うかという、ヨーロッパの都市構造は、万が一、建物がなくなったら街の雰囲気ほとんどを失ってしまうのですが、日本は建物が変わっても地形は保たれるので、街自体の雰囲気は保たれるんですね。

そういうなかで、もともとある景色が残しつつ、同時に時代によって変わっていく人間の価値観とともに新しくなっていく必要があります。そう考えるとランドスケープを生かした都市構造って、風景の中に歴史が刻まれていくということだと思うんです。だから、元々の地形がもつスケールと寄り添うように都市を更新していく必要がある。たとえば、東京には坂が多いですが、大きな建物がなかったときには、坂という巨大な地形がその地域のモニュメントやランドマークとしての役割を果たしていて、その影響から、昔から残る坂道にはその場所の雰囲気を伝える名称がそのまま残っていたりします。暗闇坂とか、けやき坂とか、なだれ坂とか。これだけ坂に名前がつく都市は世界にもほとんどないように思います。

そういう風景の記憶とともに街を考えていくのが、特に東京では重要な気がします。多くの古い建物は空襲や地震でなくなってしまったわけだけど、それでも、その場所にまだ残る街の雰囲気はそこにあるランドスケープを残すことによって保たれていくように思うんです。だから、大きな再開発などを行うときには、そのあたりのことを考慮したうえで正しいスケールと、正しい地形の読み方とともにやっていくのがいいのかなって思っています。

## 土地や周辺との関係性を考えて建物を建てる。その連続で都市ができあがる。

都市をつくることと建物をつくること、ランドスケープをつくることなど、それらの間にそれぞれ明確な役割や境界を定めなくて、人の住処を考えていくことが僕の中では重要です。都市計画があって、それに則って造成をして、その新しい地形をもとに建物を設計するというような明確なヒエラルキーや手順に縛られない手法を考えられるといいのではないのでしょうか。

たとえば、まず建物をつくって、それに合わせるように、もっと環境が良くなるように地形を少しだけ変えて、そうすると既存の都市計画では考えられていなかったところが出てくるから、それももうちょっと見直して、今度はその新しい都市計画と環境をもとに建物をつくるとか。

そういうことをスピーディに繰り返し行う。そうすると、それぞれの成り立ちが、複雑に絡み合いながら、街全体がおおらかに育っていく。もちろん、現在の法基準では相当難しいことですが、柔軟性を伴いながら、さまざまな階層からその場所の環境を維持しつつ、同時に変化させていくことが必要だと思うのです。

実際、テクノロジーが進化していくなか、複雑な情報処理を駆使して、システムをその都度変化させても成り立つような開発手法が、もしかしたら近い将来できるようになるのかもしれませんが。開発の規模やスピードがどんどん増していく現代にあって、未来の開発に必要なことは、その場所に備わる膨大な情報を細やかに奥深くまで掘り下げながら、そこに現代的価値観を与えていくことです。ただ単に、大規模にハイスピードに進めるだけのような開発手法は、中身が希薄な巨大な空洞を都市の中に挿入しているように感じる場合があります。そういう感覚が、極めて20世紀的な過去の手法とさえ思うことがあります。その場所の成り立ちをかき消して、大きく変えるのではなく、過去も未来も飛び越えて、それらさまざまな要素や情報や環境をつなぎ合わせ、その場所に複雑な関係性を与えていくことがこれから都市開発のあり方ではないでしょうか。

### **都市の歴史や雰囲気を残すことが、街のポテンシャルを引きあげる。**

誰とでもつながることができ、どこへでも簡単に行けるようになりつつある時代の中で、その場所が持つ特殊性はとても重要になりつつあるように思います。グローバル化の初期段階においては、世界中のすべての街が同じ価値観で、同じような見た目の近代的な大きなピカピカのビルが立ち並ぶことを目指していたように思いますし、今でもそのような開発が続けられている例は世界中のいろいろな場所で見ることができますが、時代は、次のステージに移行しつつあるのではないのでしょうか。

つながっている人たちが、自分が知らない風景の中にいることが伝わってきたら、やはり羨ましく思うもので、そこに行きたくなくなるということはとても重要なことです。そういうなかで、世界中がどこも同じような街並みになってしまったら、移動したいという欲求さえ生まれなくなってしまいます。移動することの理由は無限にあるかもしれませんが、見たことない場所、知らない場所に行きたいという欲求はその原動力としてとても大事なことだと思います。さまざまな企業を呼び込むためには、もしかしたら、近代的なビルがたくさん必要なかもしれませんが、グローバル化が行き渡った世界では、それだけでは人々の流動性は確保できなくなるように思います。

つまり、世界中がつながったあかつきには、それぞれの場所の固有性がより強い価値観として求められるようになるのではないのでしょうか。しかも、ただ単にその場所をそのまま残すだけでは不十分なかもしれません。

その場所が持つ歴史や文化などを踏まえつつ、それを更に掘り下げ、それらが持つ固有性を現代の価値観につなげていき、既存の固有性をさらにそのポテンシャルを高めるかたちで、その場所のあり方をつねに再考していく必要があるように思えます。

維持するだけでなく、ものすごいスピードで、ものすごい回数の再考を無限に行っていくようなダイナミックで深淵なエネルギーをその場所ごとに与えていくことがこれからの都市開発の肝になるのではないのでしょうか。

石上純也 建築家

JUNYA ISHIGAMI / Architect



published\_2018.7.4 / photo\_mariko tagashira / text\_nana okamoto

#### 六本木で必要なのは、生活スタイルと一体化して作品をつくる場。

東京の中心部でもある六本木は、いろんなものを世界から呼び寄せ、また、簡単に見せられる状況、環境ではあります。でも、アートという視点で、その街を盛り上げようとするのなら、アーティストがそこに住んでいないといけないと僕は思うんです。作り手のアクティビティと作品を見せることが一体化していないと、リアリティとして見えてこない。たとえば、ニューヨークは昔ならソーホー、今はブルックリンという街に多くのアーティストが住み、そこでの生活スタイルと一体化して作品ができあがっています。そういうあり方ができないと、単なる展示会場、見本市みたいな形になってしまうし、文化は生まれません。そういうリアルな芸術活動ができる場を、生活から掘り下げていくことが重要だと感じます。

だからといって、アーティストレジデンスのようなものをつくれればいいかといえば、そうではないですね。もちろん、ある程度の誘導は必要かもしれない。でも、与えられるより、自然発生的にアーティストが集まってくるポテンシャルを都市の中に残すことを同時にやらないと、長続きしない。

生き生きと街に根差したものになっていけば、自然と"東京らしい" "六本木らしい" アート、デザインが生まれていくんじゃないかなって。今六本木にある美術館やアート施設はちゃんとある視点ではうまく役割を果たしているとは思いますが、それ以外にどこからも持ってこられないこの場所から生まれたアートがあるといいですね。それが、街のまんなかでできたらすごいことだと思います。

## アイデアだけでなく、現実はどうフィットさせられるかが重要。

創作のオリジナリティについて考えるとき、その人の内側から湧き上がってくるものももちろん重要です。でも、同時に、その人の外側のさまざまな要素に導かれて現れるものでないと説得力がない気がしています。

たとえば、生まれ育った環境や今いる場所や周りの人間など、外側からくるものに自然と導かれていくプロセスから生まれてくるものに、僕は魅力を感じます。特に、僕の場合、建築をやっているということもあって、いろいろな創作の根源が、その場所やその土地、あるいは、クライアントが元々持っているものの延長にあるように思っているからかもしれません。場所が持つ固有性やクライアントの個性によって、現れる解答はその都度異なるし、むしろ、それら外的要素を自分なりに繊細にこつこつとショートカットせずに積み上げていった結果、形づくられたものに、独創性が宿るように感じています。一般性に照らし合わせると省略できるものでもショートカットせずに積み上げていくことが重要です。そうして積み上げられたものは、自然と一般性から逸脱していくものです。

そういう意味では、極論を言えば、突拍子なく突然現れる、ほかと何も関係を持たない閉じたアイデアにはあまり魅力を感じません。どちらかと言えば、アイデアそのものは誰でも考えられると思うのです。今の時代、さまざまな人が考えた多種多様なアイデアへとても簡単にアクセスできる気がするし、それ自体はあまり人に感動を与えないように思っています。どちらかという、そのアイデアを現実の世界でどうやってフィットさせていくことができるか、現実のコンテキストにどのように関係づけて、実現していくことができるかが重要です。眼の前に現実に現れる景色に対してこみ上げる感動は、いろいろなものが情報化されていく現代において、特に心の奥底に突き刺さります。だからこそ、リアリティとともにものがつくり出され、それをそのリアリティとともに表していくことが重要だと思うのです。



石上純也 建築家

JUNYA ISHIGAMI / Architect

published\_2018.7.4 / photo\_mariko tagashira / text\_nana okamoto

### ものも建築も、誰でも受け入れられる状態にすることが重要。

カルティエ現代美術財団での『Junya Ishigami, Freeing Architecture』でも展示しているいくつかの作品も、ある意味唐突に見えるかもしれませんが、それは、それぞれのプロジェクトのコンテキストを理解していないから。それぞれをよく眺め、プロジェクトが理解できたときには、とても自然で当たり前のことのように感じるはず。不自然にも見えるようなとても強い考え方を、できる限り自然に、誰でも受け入れられるようなものにしていく過程は、僕の中ではとても重要で、作業の大半のエネルギーはその部分に使われています。たとえば、神奈川工科大学の『KAIT 工房』。これはたくさんの細くて薄い柱によって構造も空間も同時に生み出そうと考えたプロジェクトです。

しかしながら、たくさんの柱で建築を計画するというアイデアなのに、できあがった空間に入ったときに柱が邪魔で鬱陶しいと感じてしまったら元も子もありません。だからここでは、どれだけ少ない柱で、柱が多いという表現ができるかを真剣に考えました。柱が多いというメリットを保つことのできる、最低限の柱の本数が何本かを探りました。写真で空間の雰囲気を見ると多いと感じるかもしれませんが、実際に入ると、不思議と柱の存在感はすうっと消えていくように感じると思います。

どんなに極端なものも、誰でも受け入れられる状態にすることが重要なんです。もっと簡単に言うと、パソコンや携帯もそう。気づいたらみんなが当たり前で自然と持っていた。そうやって、いつの間にかフィットしているものをつくるって簡単ではないかもしれませんが、ひと晩で全く異なる世界をつくりだすような革命的な変化をあたえる強制的な力よりは、いつの間にかみんなから受け入れられている「浸透力」のほうが、現代においては強いように思うのです。強力な浸透力をもった透明な価値観は、多くの人に触れる建築を考えるとときには、とても重要な価値観のような気がしています。



#### 『Junya Ishigami, Freeing Architecture』

2018年3月30日からパリのカルティエ現代美術財団で開催している個展。6月までの予定だったが好評を博し、9月9日まで会期が延長されることになった。石上さんのアジアとヨーロッパにおける建築プロジェクトから20作品をセレクトし、構想から建築までを記録した映像やドローイング、模型などを展示。本美術財団が、ひとりの建築家を特集するのは初の試み。



#### KAIT

神奈川県工科大学内にある、学生が自由にものづくりを行える工房。まるで森の中に立つ木のように建てられた柱は、石上さんいわく『300本以上の細くて薄い柱がすべての構造を支える。壁はない。一見、ランダムに並べられた柱は、ランダムにみえて、ランダムではない。厳密に計算した結果のあらわれ。いろんな角度から模型で柱の位置を調整し記録する。』

それをなんども繰り返す。ここにある記録はそういう数え切れないほどのスタディのひとつ』。石上さんにとっては、独立後、初となる建築であり、その斬新で柔軟な発想が認められ、建築学賞とBCS賞を受賞。

KAIT Workshop © junya.ishigami+associates



## 街、場所、建物の持っている可能性を最大限に引き上げることが建築の役割。

ロシアで『モスクワ科学技術博物館』の増改築をやらせてもらいましたが、歴史的建造物なので建物を壊しちゃいけないんです。建物を残す、ポテンシャルを保つ上では、既存の建造物を生かすことがとても有効ですが、それゆえの難しさもありました。たとえば、建物の上から新しいものを被せて覆ってしまうような取ってつけたリノベーションなら、法的には通しやすいんです。新しく覆った外を壊せば、もともとの建物に戻るから。でも、それだと建物の見た目も雰囲気もまったく変わってしまって台なし。その建物がもともと備える雰囲気などよりも、ハードとして、躯体が傷なく残ることのほうが重要なのです。

それはもちろんそうなのかもしれませんが、古い建物をどうやってその雰囲気を保ちつつその可能性を引き上げていくことができるか、現代の価値観に合わせつつ古い雰囲気を残すことができるか、そういうことを本当は真剣に考えなければならないと思うのです。このプロジェクトでは、そのような価値観のひとつの解答として提案したつもりです。もともとあるものに手を付けずに大切に保存することは大事ですが、それ以上にその街、場所、建物の持っている可能性を最大限に引き上げ、現代においてもそれらの歴史性や場所性をちゃんと僕たちの感覚をもって体感できるようにしていくことが、建築家の役割だと思うんです。

現実の世界で、その現実の可能性を更に高めていくことこそが、建築の可能性だと思っています。パソコンや携帯があれば、場所や時間に関係なく、いろいろできてしまう時代です。そのなかで、建築の役割は、その場所でその時にしかできないサイトスペシフィックなポテンシャルを高めることです。建築は動くことができません。動けないからこそ、そこに生まれる可能性についてこれからも考えていきたいです。



モスクワ科学技術博物館

増改築プロジェクトのコンペティションで石上さんの案が採用され、2016年に完成。「公園のような美術館」をコンセプトに、地域の人々に開かれたパブリックスペースをつくり上げた。なかでも、透明の屋根を持つ「ミュージアムパーク」を地下に展開し、周辺環境と一体化させた石上さんらしいアイデアは多くの人を驚かせた。

Polytechnic Museum

© junya.ishigami+associates

## 取材を終えて .....

2017年の21\_21 DESIGN SIGHT 『「そこまでやるか」壮大なプロジェクト展』、2018年の森美術館『建築の日本展』と、2年連続六本木で展示を行うことになった石上さん。事務所も六本木に構え、さぞかし六本木のグルメ事情にも詳しいのかと思いきや、実はあまり六本木で食事をすることはないのだとか。「好きなバーはあるんですけどね」と話す石上さん。イメージ通りのスマートでおしゃれな方でした。(text\_nana okamoto)